歸有光の壽序

——民間習俗に參加する古文——

鷲野正明

はじめに

文學史上、歸有光（字熙甫、號震川、一五〇六—一五七一）の代表作とされるものは、いずれも身邊に起った事象が克明に、しかし淡淡と描寫され、盡きない感情が字裏行間から流露する作品である。例えば十九歳の時の「項脊軒志」[1]（『震川先生集』卷十七）、二十四歳頃の「先妣事略」（卷二十五）、また三十二歳の時の「寒花葬誌」（卷二十二）や三十四歳の時の「女二二壙誌」（卷二十二）などであるが、これ等は、黄宗羲（一六一〇—一六九五）が

予讀震川文之爲女婦者、一往深情、每以一二細事見之、使人欲涕。（『南雷文案』卷八「張節母葉孺人墓誌銘」）。

と云う如く、母や妻や子どもの死をテーマにした悲しみに滿ちた作品である。

ところが、歸有光の作品を文體別にみると、壽序七十六篇、贈送序六十三篇、記と墓誌銘がそれぞれ五十七篇という具合に、代表作の〈死〉〈悲しみ〉の對極をなす〈生〉〈喜び〉を表現する壽序が最も多いのである。[2] しかもこの壽序は、歸有光を顯彰した桐城派の方苞（一六六八—一七四九）が

震川之文、鄉曲應酬者十六七、而狥請者之意、襲常綴瑣、雖欲大遠於俗言、其道無由。（『方望溪先生全集』卷五「書歸震川文集後」）

と云う如く、應酬の文であることからその評價は低く、以後もその不評は續いた。[3] 現在でも、例外的に山之內正彥氏がそれまで一地方の文體であったものを歸有光が「文學にまで高めた」[4]と評價はしているものの、一般に周本淳氏が

同時，論說、壽序之類寫得太多太濫，別集中有許多應制文也沒有什麼價值。（『震川先生集』（上海古籍出版、一九八一）前言）

と言う如く、壽序の價値は認められていないのである。[5]

文學の評價は、後世の文學觀や價値觀に據るものであるとしても、韓愈（七六八—八二四）の墓誌銘が諛墓と譏られたように、應酬の文はいつの時代でも士大夫の否定するものであり、その點で歸有光の壽序も例外ではない。しかし、壽序は五十歳以上の長壽者の誕生日を祝賀する〈壽誕〉という民間習俗に要求された文であり、一般民衆も多數書いていたことや、後に附した表に明らかなように、歸有光の壽序が現存最多であり、しかも歸有光以降壽序制作が知識人の間に廣く浸透するようになったことを考えると、〈死〉〈悲しみ〉の名作を書き古文の名手とされる歸有光が、壽序の諛辭に陷ることを避け、それまで爲

政者の專有文であった古文を民間習俗の中に參加定着させたとも評價できるのである。

家族の死を悲しみ、一方で社會の人々の長壽を祝賀する作品を數多く書き綴った歸有光は、一體壽序にどのような價値を見い出していたのであろうか。

姓名	字或號	籍貫	生卒年	壽序	壽詩序	序	%	壽詩	調査文集	備考
宋										
王禹偁	元之	濟州鉅野	九五四・一〇〇一	0	0	30	0	0	小畜集（四部叢刊）	
林逋	君復	錢塘	九六七・一〇二八	0	0	0	0	0	林和靖先生詩集（〃）	（%は序（壽序×100））
穆修	伯長	鄆州	九七九・一〇三二	0	0	7	0	0	河南穆公集（〃）	
范仲淹	希文	吳縣	九八九・一〇五二	0	0	11	0	0	范文正公集（〃）	
梅堯臣	聖兪	宣城	一〇〇二・一〇六〇	0	0	1	0	0	宛陵先生集（〃）	
歐陽修	永叔	廬陵	一〇〇七・一〇七二	0	0	49	0	0	歐陽文忠公文集（〃）	
蘇舜欽	子美	梓州銅山	一〇〇八・一〇四八	0	0	4	0	0	蘇學士文集（〃）	
李覯	泰伯	南城	一〇〇九・一〇五九	0	0	7	0	0	直講李先生文集（〃）	
蘇洵	明允	眉州眉山	一〇〇九・一〇六六	0	0	1	0	0	嘉祐集（〃）	〃引〃
邵雍	堯夫	范陽	一〇一一・一〇七七	0	0	0	0	0	伊川擊壤集（〃）	
曾鞏	子固	建昌南豐	一〇一九・一〇八三	0	0	40	0	0	元豐類藁（〃）	
司馬光	君實	夏縣	一〇一九・一〇八六	0	0	27	0	0	溫國文正司馬文集（〃）	
文同	可梓	潼	一〇一九・一〇七九	0	0	15	0	0	丹淵集（〃）	
王安石	介甫	臨川	一〇二一・一〇八六	0	0	17	0	0	臨川先生文集（〃）	
蘇軾	子瞻・東坡	眉州眉山	一〇三六・一一〇一	0	0	12	0	5	集註分類東坡先生詩（〃）	慶賀十五首中の生日の壽詩
蘇轍	子由	〃	一〇三九・一一一二	0	0	3	0	0	欒城集（〃）	
黃庭堅	魯直	洪州分寧	一〇四五・一一〇五	0	0	35	0	0	豫章黃先生文集（〃）	
秦觀	少游	高郵	一〇四九・一一〇〇	0	0	10	0	0	淮海集（〃）	
張耒	文潛	楚州淮陰	一〇五二・一一一二	0	0	14	0	1	張右史文集（〃）	
陳師道	履常	彭城	一〇五三・一一〇一	0	0	0	0	0	后山詩註（〃）	
晁補之	無咎	鉅野	一〇五三・一一一〇	0	0	25	0	0	濟北晁先生雞肋集（〃）	
汪藻	彥章	饒州德興	一〇七九・一一五四	0	0	5	0	2	浮溪集（〃）	
陳與義	去非	洛城	一〇九〇・一一三八	0	0	0	0	0	簡齋詩集（〃）	
王十朋	龜齡	溫州樂清	一一一二・一一七一	0	0	8	0	1	梅溪王先生文集（〃）	

元

洪适	景伯	鄱陽	一一一七・一一八四	0	0	10	0	0	盤洲文集（〃）	
楊萬里	廷秀	吉水	一一二四・一二〇六	0	0	73	0	0	誠齋集（〃）	
陸游	務觀	呉縣	一一二五・一二一〇	0	0	34	0	0	渭南文集（〃）	
范成大	至能	呉縣	一一二六・一一九三	0	0	0	0	4	石湖居士詩集（〃）	
朱熹	元晦	婺源	一一三〇・一二〇〇	0	0	64	0	0	朱文公文集（〃）	
樓鑰	大防	鄞縣	一一三七・一二一三	0	0	40	0	5	攻媿集（〃）	
陸九淵	象山	撫州金谿	一一三九・一一九二	0	0	3	0	0	象山先生全集（〃）	
陳傅良	君擧	溫州瑞安	一一四一・一二〇七	0	0	13	0	6	止齋先生文集（〃）	
葉適	正則	永嘉	一一五〇・一二二三	0	0	34	0	0	水心先生文集（〃）	
趙秉文	周臣	滏陽	一一五九・一二三二	0	0	8	0	3	閑閑老人滏水文集（〃）	
王若虛	從之	稾城	一一七四・一二四三	0	0	6	0	0	滹南遺老集（〃）	
眞德秀	景元	浦城	一一七八・一二三五	0	0	66	0	6	西山先生眞文忠公文集（〃）	
魏了翁	華父	蒲江	一一七八・一二三七	0	0	69	0	6（19）	鶴山先生大全文集（〃）	（　）内は〃生日〃
劉克莊	潛夫	莆田	一一八七・一二六九	0	0	101	0	1	後村先生大全集（〃）	
耶律楚材	晉卿	契丹	一一九〇・一二四三	0	0	14	0	0	湛然居士文集（〃）	
元好問	裕之	秀容	一一九〇・一二五七	0	0	30	0	4	遺山先生文集（〃）	%の下段は、(壽序＋壽詩序)/序×100
方回	萬里	歙	一二二七・一三一一	0	1	41	0 2.4	0	桐江集（元代珍本文集彙刊）	
王惲	仲謀	衞州汲縣	一二二八・一三〇四	0	2	62	0 3.2	64	秋澗先生大全文集（四部叢刊）	
文天祥	宋端	吉水	一二三六・一二八二	0	0	34	0	5	文山先生文集（〃）	〃壽表〃二篇 〃壽疏〃一篇あり
姚燧	端甫	柳城	一二三九・一三一四	0	2	25	0 8	0	牧菴集（〃）	
張伯淳	師道	杭州崇德	一二四二・一三〇二	0	0	18	0	27	養蒙先生文集（元珍）	
戴表元	帥初	奉化	一二四四・一三一〇	0	1	146	0 0.68	2	剡源戴先生文集（四叢）	
劉因	夢吉	容城	一二四九・一二九三	0	2	17	0 11.7	6	靜修先生文集（〃）	
程文海	鉅夫	京山人家建昌	一二四九・一三一八	0	1	61	0 1.6	19	程雪樓文集（元珍）	
趙孟頫	子昂	歸安	一二五四・一三二二	0	0	19	0	1	松雪齋文集（四叢）	
蒲道源	得之	眉州人徙興元	一二六〇・一三三六	0	1	43	0 2.3	17	閒居叢稿（元珍）	
劉岳申			一二六〇・一三四六頃	0	2	50	0 4	0	申齋劉先生文集（〃）	
袁桷	伯長	鄞	一二六七・一三二七	0	0	25	0	24	清容居士集（四叢）	啓疏に五篇の壽文あり

明

柳貫	道傳	浦陽	一二七〇・一三四二	0	0	28	0	0	柳待制文集（四叢）
楊載	仲弘	杭州	一二七一・一三二三	0	0	0	0	5	翰林楊仲弘詩集（〃）
虞集	伯生	仁壽	一二七二・一三四八	0	5	109	0 2.8	5	道園學古錄（〃）
掲傒斯	曼碩	富州	一二七四・一三四四	0	0	30	0	1	掲文安公全集（〃）
黃溍	晉卿	婺州義烏	一二七七・一三五七	0	0	80	0	3	金華黃先生文集（〃）
吳師道	正傳	蘭谿	一二八三・一三四四	0	1	58	0 1.7	1	吳正傳先生文集（元珍）
歐陽玄	原功	吉州	一二八三・一三五七	0	0	38	0	0	圭齋文集（四叢）
陳旅	衆仲	興化莆田	一二八八・一三四三	0	1	52	0 1.9	3	安雅堂文集（元珍）
鄭元祐	明德	錢塘	一二九二・一三六四	1	0	26	3.9	2	僑吳集（〃）
蘇天爵	伯修	眞定	一二九四・一三五二	0	0	27	0	1	滋溪文稿（〃）
楊維禎	廉夫	會稽	一二九六・一三七〇	0	0	171	0	0	東維子文集（四叢）
吳萊	立夫	浦江	一二九七・一三四〇	0	0	26	0	0	淵潁吳先生文集（〃）
倪瓚	元鎭	無錫	一三〇一・一三七四	0	0	5	0	0	清閟閣全集（元珍）
宋濂	景濂	浦江	一三一〇・一三八一	0	0	165	0	0	宋學士文集（四叢）
劉基	伯溫	靑田	一三一一・一三七五	0	0	41	0	0	誠意伯文集（〃）
戴良	叔能	浦江	一三一七・一三八三	0	0	64	0	0	九靈山房集（〃）
貝瓊	廷琚	崇德	一三一七・一三七九	0	0	67	0	0	清江貝先生文集（〃）
蘇伯衡	平仲	金華		0	0	41	0	0	蘇平仲文集（〃）
高啓	季迪	長洲	一三三六・一三七四	0	0	36	0	0	高太史鳧藻集（〃）
周德	是脩		一三五五・一四〇三	0	0	37	0	0	芻蕘集（明代藝術家集彙刊）
方孝孺	希直	寧海	一三五七・一四〇二	0	0	96	0	0	遜志齋集（四叢）
杜瓊	用嘉	吳縣	一三九六・一四七四	1	0	2	50	5	杜東原集（明藝）
沈周	啓南	長洲	一四二七・一五〇九	0	3	4	0	21	石田先生集（〃）
楊守陳	維新	鄞	一四三〇・一四八九	1	3	178	0.5 2.2	0	楊文懿公文集（內閣文庫藏）
吳寬	原博	長洲	一四三五・一五〇四	5	5	90	5.6 11.1	14	匏翁家藏集（四叢）
王鏊	濟之	吳縣	一四五〇・一五二四	0	0	58	0	13	震澤集（四庫全書珍本五集）
羅玘	景鳴	南城		25	11	181	13.8 19.9	24	圭峰集（〃 四集）
祝允明	希哲	長洲	一四六〇・一五二六	0	0	54	0	3	祝氏詩文集（明藝）
王九思	敬夫	鄠	一四六八・一五五一	4	3	38	10.5 18.4	7	美陂集（明代論著叢刊）

文徴明	徴仲	長洲	一四七〇・一五五九	1	0	24	4.17	1	甫田集（明藝）
王守仁	伯安	餘姚	一四七二・一五二八	2	1	55	3.6 5.5	0	王文成公全書（四叢）
李夢陽	獻吉	慶陽	一四七二・一五二九	7	0	81	8.6	2	空同先生集（明論）
王廷相	子衡	儀封	一四七四・一五四四	0	0	36	0	3	王氏家藏集（明論）
康海	德涵	武功	一四七五・一五四〇	2	1	44	4.6 6.8	2	對山文集（〃）
邊貢	廷實	歴城	一四七六・一五三二	0	0	0	0	26	邊華泉集（〃）
徐禎卿	昌穀	呉縣	一四七九・一五一一	0	0	0	0	0	廸功集（〃）
何景明	仲默	信陽	一四八三・一五二一	3	3	89	3.4 6.7	3	何文肅公文集（〃）
王寵	履吉	長洲	一四九四・一五三三	0	0	6	0	1	雅宜山人集（明藝）
謝榛	茂秦	臨清	一四九五・一五七五	0	0	0	0	1	四溟山人全集（明論）
夏良勝	於中	南城		2	1	34	5.9 8.8	6	東洲初稿（四庫珍本三集）
徐階	存齋	松江華亭	一五〇三・一五八三	20	0	110	18.1	6	世經堂集（内閣文庫藏）
劉繪	汝素	光洲	一五〇五・一五七三	9	0	75	12	1	嵩陽先生集（東洋文庫藏）
歸有光	熙甫	崑山	一五〇六・一五七一	70	6	139	50.4 54.6	0	震川先生集（四叢）
何良俊	元朗	華亭	一五〇六・?	7	0	26	26.9	17	何翰林集（明藝）
唐順之	荊川	武進	一五〇七・一五六〇	6	0	49	12.2	20	荊川先生文集（四叢）
趙貞吉	孟靜	内江	一五〇八・一五七六	8	0	34	23.5	4	趙文肅公文集（内閣文庫藏）
王愼中	道思	晉江	一五〇九・一五五九	23	0	138	16.7	11	遵巖集（四庫珍本八集）
趙時春	景仁	平涼	一五〇九・一六〇五	15	0	123	12.1	12	趙浚谷集（内閣文庫藏）
嚴訥	敏卿	常熟	一五一一・一五八四	2	0	22	9	2	嚴文靖公集（〃）
呉國倫	明卿	興國		13	0	79	16.5	16	甔甀洞藁（明論）
李攀龍	于鱗	歴城	一五一四・一五七〇	1	0	42	2.4	1	滄溟先生集（〃）
徐中行	子與	長興	一五一七・一五七八	7	0	32	21.8	10	徐天目先生集（〃）
胡直	正甫	泰和	一五一七・一五八五	8	0	73	10.9	4	衡廬精舍藏稿（四庫珍本四集）
梁有譽	公實	順德	一五一九・一五五四	1	0	12	8.3	0	蘭汀存稿（明論）
徐渭	文長	浙江山陰	一五二一・一五九三	2	0	65	3.1	11	徐文長三集（明藝）
宗臣	子相	揚州	一五二五・一五六〇	1	0	62	1.6	0	宗子相集（明論）
張居正	叔大	江陵	一五二五・一五八二	9	0	30	30	3	張太岳集（内閣文庫藏）
王世貞	元美	太倉	一五二六・一五九〇	37	0	204	18.1	2	弇州山人四龍稿（明論）

許孚遠	孟中	德清	一五三五・一六〇四	4	0	26	15.4	1	敬和堂集（内閣文庫藏）
馮夢禎	開之	秀水	一五四八・一五九五	22	0	138	15.9	1	快雪堂（〃）
董其昌	玄宰	華亭	一五五五・一六三六	17	0	66	25.8	40	容臺集（明藝）
范允臨	長倩	吳縣	一五五八・一六四一	6	0	37	16.2	27	輸寥館集（〃）
袁宗道	伯修	公安	一五六〇・一六〇〇	7	1	18	38.9 44.4	3	白蘇齋類集（明論）
高攀龍	存之	無錫	一五六二・一六二六	21	0	76	27.6	2	高子遺書（内閣文庫藏）
李日華	君實	嘉興	一五六五・一六三五	23	0	204	11.3	117	恬致堂集（明藝）
袁宏道	中郎	公安	一五六八・一六一〇	7	0	37	18.9	12	袁中郎全集（明論）
袁中道	小修	〃	一五七〇・一六二三	12	0	78	15.4	9	珂雪齋集（〃）
黃輝				7	0	30	23.3	0	黃太史怡春堂逸稿（〃）
陶望齡	周望	會稽	・一六〇九	36	2	127	28.4 29.9	0	歇庵集（〃）
鍾惺	伯敬	竟陵	一五七四・一六二四	11	0	57	19.3	1	隱秀軒詩集（〃）
譚元春	友夏	〃	一五八六・一六三一	1	0	45	2.2	1	譚友夏合集（〃）

一　歸有光の境遇

歸有光の代表作の一つである「項脊軒記」（巻十七）は、十九歳の時に「志」として書かれ、その後三十歳の時に百十四字加筆されたものである。[6] 歸有光自身愛着を持つ作品であったのだろう。しかしそこに述べられているのは家庭内の不幸であり、それは次の四點にまとめることができる。[7] ①伯叔父たちの別居②母親の死③試驗に落第して一族の期待が果せないこと④妻の死。これ等は、悲しい出來事として次の様に描かれている。

①先是、庭中通南北爲一。迨諸父異爨、內外多置小門牆、往往而是。東犬西吠、客踰庖而宴、雞棲於廳。庭中始爲籬、已爲牆、凡再變矣。②家有老嫗、嘗居於此。嫗、先大母婢也。乳二世、先妣撫之甚厚。室西連於中閨、先妣嘗一至、嫗每謂予曰、「某所、而母立於兹。」嫗又曰、「汝姊在吾懷、呱呱而泣。娘以指扣門扉曰、『兒寒乎、欲食乎。』吾從板外相爲應答。」語未畢、余泣、嫗亦泣。③余自束髮讀書軒中。一日、太母過余曰、「吾兒、久不見若影、何竟日默默在此、大類女郎也。」比去、以手闔門、自語曰、「吾家讀書久不效、兒之成、則可待乎。」頃之、持一象笏至、曰、「此吾祖太常公宣德間執此以朝。他日、汝當用之。」瞻顧遺跡、如在昨日。令人長號不自禁。……④余既爲此志後五年、吾妻來歸。時至軒中從余問古事、或憑几學書。吾妻歸寧、述諸小妹語曰、「聞姊家有閣子、且何謂閣子也。」其後六年、吾妻死、室壞不修。其後二年、余久臥病無聊、乃使人復葺南閣子。其制稍異于前、然自後余多在外、不常居。庭有枇杷樹、吾妻死之年所手植也。今已亭亭如蓋矣。

歸家は崑山地方では甚だ信望の厚い大家族であり、有光の高祖（諱璿、字文美）の頃の人々は「縣官の印も、歸家の信に如かず」[8]と言って

いたほどであった。しかし有光が生まれた頃から次第に衰落し、親戚の人々の心は乖離し、欲深く道理にはずれた行爲をする者が出た。右の引用文の①では、棲むべからざる客間に雞が棲みついたことを述べ、封建大家族の別居の悲慘を表わしているが、「家譜記」（卷十七）ではそれを以下の如く詳細に記述している。

歸氏至於有光之生、而日益衰。源遠而末分、口多而心異。自吾祖及諸父而外、貪鄙詐戾者、往往雜出於其間。率百人而聚、無一人知學者、率十人而學、無一人知禮義者。貧窮而不知恤、頑鈍而不知教、死不相弔、喜不相慶、入門而私其妻子、出門而誑其父兄、冥冥汶汶、將入於禽獸之歸。平時呼召友朋、或費千錢、而歲時薦祭、輒計杪忽。俎豆壺觴、鮮或靜嘉。諸子諸婦、班行少綴。乃有以戒賓之故、而改將事之期、出庖下之餘、以易薦新之品者。而歸氏幾於不祀矣。

こうした歸家へ、有光の母周氏（諱桂）が十六歲の時に嫁いできた。苦勞を厭わない働き者で、やさしい人であったと、「先妣事略」（卷二十五）では、

孺人之吳家橋、則治木綿、入城則緝纑、燈火熒熒、每至夜分。外祖不二日、使人問遺、孺人不憂米鹽、乃勞苦若不謀夕。冬月爐火炭屑、使婢子爲團、累累暴階下。室靡棄物、家無閒人。兒女大者攀衣、小者乳抱、手中紉綴不輟、戶內灑然。遇僮奴有恩、雖至箠楚、皆不忍有後言。

と記している。母の實家は吳家橋で、祖父とその三人の兄はいずれも財産家で、土地の實力者だった。しかもまじめな人柄で、人々とにこやかに村の噂話をしたり、子供たちや甥姪を可愛がった。また嫁に出した娘、つまり有光の母かわいさに、いろいろと物を屆けさせたりもした。それで歸家では、吳家橋から人が來ると皆喜んだという。ところが、母が正德八年（一五一三）有光八歲の時に死亡してまもなく、母の實家では疫病に襲われ、祖母・舅母を初めとして三十人もの人が續けて死亡し、生き殘ったのは祖父とその二人の兄の、僅か三人だけであった（「先妣事略」）。

母が死去した時の樣子は、次の樣に記されている。

正德八年五月二十三日、孺人卒。諸兒見家人泣、則隨之泣、然猶以爲母寢也、傷哉。（「先妣事略」）

歸有光は、死がどういうものか理解できなかった。このことは逆に、成長するにつれて母への思慕を強め、また母のいない悲しみを人一倍味うことになった。「項脊軒記」の②の描寫や、次の引用がそれを如實に語っていよう。

孺人死十一年、大姊歸王三接、孺人所許聘者也。十二年、有光補學官弟子、十六年而有婦、孺人所聘者也。期而抱女、撫愛之、益念孺人、中夜與其婦泣、追惟一二、彷彿如昨、餘則茫然矣。世乃有無母之人、天乎、痛哉。（同）

右の引用のように、歸有光は嘉靖四年（一五二五）の二十歲の時に、蘇州府學の生員に補せられた。そして二十三歲の時、亡き母が訂婚しておいた魏氏と結婚した。彼女は光祿寺典簿魏痒の娘で、當時著名な儒者莊渠先生魏校(9)（一四八三―一五四三）の姪であった。母周氏同樣、貧困を厭わない聰明な人であったことは「請敕命事略」（卷二十五）に詳しい。

先妻少長富貴家、及來歸、甘澹薄、親自操作。時節歸寧外家、以有光門第之舊、而先妻未嘗自言、以爲能可以自給。及病、妻母遣人日來省視、始歎息、以爲姐何素不自言、不知其貧之如此也。嘗謂有

光曰、「吾日觀君、殆非今世人。丈夫當自立、何憂目前貧困乎。」事舅及繼姑孝敬、閨門內外大小之人、無不得其懽。人以爲有德如此、不宜夭歿。而生一子、甚俊慧、又夭。僅存一女。天道竟不可知矣。

亡き母を思い起こさせる母の忘れ形見とでも言える妻は、歸有光二十八歳の時に病死した。この悲しみがどれ程大きかったかは、「項脊軒記」に④として加筆されたことや、「寒花葬誌」によって窺えよう。しかし歸有光の不幸はこれだけに止まらず、「はじめに」に記した作品が書かれる契機があったことは言うまでもない。そして更に有光四十三歳の時には、先妻魏氏が殘した長男の子孝が、四十六歳の時には二度目の妻王氏が死去している。有光自身は、「項脊軒記」の③で豫言されたかたちで、三十五歳に鄉試に合格したものの、進士には八度も落第し、合格したのは六十歳の時であった。

身內が陸續として死亡するたびに、黃宗羲が云っていたように「一・二の細事を以て之を見し、人をして涕かんと欲せしめ」る作品を作ったのであるが、それは幼少時の母の死によって、〈死〉や〈悲しみ〉に對する過敏な性格を培ったためである。そうした肉身の不幸による悲しみを度々味わった歸有光は、社會に於ける不幸な人々にも眼が向くようになった。そのことは、有光三十九歳の時、妻としての本分を盡くしながら、うら若くして殺害された張貞女への並々ならぬ同情(10)や、或いはその後節婦や貞女を顯彰したことによって窺えよう。

二　壽序にみえる批判精神

前節で引用した「家譜記」の冒頭で、

有光七八歲時、見長老、輒牽衣問先世故事。蓋緣幼年失母、居常不自釋、於死者恐不得知、於生者恐不得事、實創巨而痛深也。

と云うことから、歸有光は八歳で母を失ったことにより、死と生とを意識するようになったことが分かる。つまり、〈生〉〈喜び〉を表現する壽序の制作も母の死に淵源があり、その意味で壽序も彼の代表作品と同一線上にあると言えるのである。

それ故壽序の中では、長壽を祝賀することは當然の情であると、次の様に云っている。

嘉靖二十七年正月六日、山齋先生六十之誕辰。先生既却賀者、或謂予、先生之謙德宜爾也。然而喜且賀者、吾徒之情也、可以抑而不宣乎。老子曰、「仁者送人以言。」敢以言爲賀、可乎。（卷十二「山齋先生六十壽序」）

しかし、やはり「家譜記」に於いて、

有光每侍家君、歲時從諸父兄弟執觴上壽、見祖父皤然白髮。竊自念、吾諸父兄弟、其始一祖父而已。今每不能相同、未嘗不深自傷悼也。然天下之事、壞之者自一人始、成之者亦自一人始。仁孝之君子、能以身率天下之人、而況於骨肉之間乎。古人所以立宗子者、以仁孝之道責之也。宗法廢而天下無世家、無世家而孝友之意衰。風俗之薄日甚、有以也。

と云う如く、單に長壽者を祝うだけではなく、母の死に淵源する生者への思いが、骨肉から宗法へ、更に世家へと推し廣められ、孝友の道の衰退する世俗を危惧するようになったことを注意しなければならない。當然のことながら、歸有光の壽序は、表面から長壽者を讚美するものは少なく、議論を展開したり、時勢を批判したりすることになる。批判をしている例を擧げると、

①吾崑山之俗、尤以生辰爲重。自五十以往、始爲壽每歲之生辰而行事。其於及旬也、則以爲大事。親朋相戒畢致慶賀、玉帛交錯、獻酬

燕會之盛、若其禮然者。不能者、以爲耻。富貴之家、往往傾四方之人、又有文字以稱道其盛。考之前記、載吳中風俗、未嘗及此、不知始於何時。長老云、行之數百年、蓋至于今而益侈矣。（卷十「默齋先生六十壽序」）

②余嘗謂今之爲壽者、蓋不過謂其生於世幾何年耳、又或往往概其生平而書之、又類於家狀、其非古不足法也。余居鄉、見吾郡風俗、大率於五禮多闕略。而於壽誕獨重其禮、而又多謁請文辭以誇大之。以爲吳俗侈靡特如此。而至京師、則尤有甚焉。（卷十二「李氏榮壽詩序」）

③東吳之俗、號爲淫侈、然於養生之禮、未能具也。獨隆于爲壽。人自五十以上、每旬而加。必於其誕之辰、召其鄉里親戚爲盛會、又有壽之文、多至數十首、張之壁間。而來會者飲酒而已、亦少睇其壁間之文、故文不必其佳。凡橫目二足之徒、皆可爲也。（卷十三「陸思軒壽序」）

の如く、當時の奢侈な壽誕と空疎な內容の壽序が批判されている。當時の壽誕は裕富な經濟力を背景に、昔諸侯が天子に拜謁した時のように玉や絹織物を長壽者に贈り、祝賀會の主催者側では盛大に宴會を取り行った。そうすることが禮であると思われており、それができないと恥になった。それ故、富貴の家では近隣近在の人々を招待して、その盛大さを誇示することもあったのである。詩文は多い時には數十篇にも及び、それを壁に張り回らしたが、それ等は張られるだけの裝飾物であったり、單に盛大さを稱道するだけの內容のないもので、何年に生まれて今は何歲と云うだけであったり、經歷を概述したり、家庭や家族を紹介するだけのものであったのである。

現狀批判は、①の最後の部分で、「之を前記に考うるに云々」と述べているように、歷史的省察によって、より說得力を持つであろう。それ故②の引用の前の部分では、壽誕・壽序の歷史を以下のように敍述している。

余讀王制、觀虞・夏・商・周養老燕饗食之禮、年紀之次、及深衣・燕衣・縞衣・玄衣之制、何其備也。至天子於太學、執醬而饋、執爵而酳、公卿奉杖、大夫進履、其隆重如此。故曰、三代之盛王、未有遺年者也。年之貴於天下久矣、然而無爲壽者。豳詩稱、「躋彼公堂、稱彼兕觥、萬壽無疆。」自此而詩之稱壽不一。顧亦相祝頌之詞、如史之所稱爲壽者云耳。非以年之每進一紀、爲燕會以爲壽也。迨後世壽節慶賀、始於朝廷、而及於公卿、然爲文以稱其壽者亦無之。（卷十二「李氏榮壽詩序」）

右の樣な論敍は、現狀批判から新たなる建設を論ずる際の手續きになることは言うまでもないが、そのことについては次節で述べることにして、ここでは右の引用を補足しておくことにする。

歸有光が指摘する如く、「王制」（『禮記』）には五十歲以上の人に對する禮が細かく規定されているが、それは長壽であることを祝賀するものではない。また『詩經』には「七月」（豳風）を始めとして雅・頌に長壽を祝賀する言葉が多くみられるが、これ等は公的な場で酒盃を捧げ持ち、長壽を祈念するもので、宗教的祭禮に於ける儀禮の一つと考えられる。[11] ところがこれは時代が降ると宗教性はなくなり、例えば『史記』「淳于髡傳」や、「項羽本紀」の鴻門の會の場面にみられるように、目上の人に酒盃を進める禮となった。史書に「上壽」「爲壽」と表記され、顏師古（五八一―六四五）が「凡言爲壽、謂進爵於尊者、而獻無疆之壽」と注しているものがそれであるが、これとても五十歲以上の長壽を祝賀するものでは決してなかった。

一方誕生祝いは、主に江南地方において四世紀ころから始まった。

滿一歳の兒女の賢愚や將來を占うために行われた「試兒」の風習がそれである。[12] 降って唐代では開元十七年（七二九）八月五日、玄宗皇帝が百僚を興慶宮の花萼樓に集めて酒宴を張り、誕生日を祝った。そして源乾曜・張說等の上表によって八月五日を千秋節と定め、以後、全國的に天子の生日を祝う風習が定着したのである。[13]

しかし、誕生祝いが行われ、酒宴の席で長壽を祀る祝詞を述べても、それは五十歳以上の長壽を祝うものではなかった。當然壽序が作られることもなかった。

宋之季年、始以詩詞儷語相投贈。及今世、更益以所謂序者。計其所述、不過謂其生于世幾年、而至累數百言不止。（卷十三「周翁七十壽序」）

とも云っているように、結局壽誕は宋以降に行われ、それにつれてまず壽詩が作られ、明代になると壽序が盛んに作られるようになったのである。この邊の經緯は、先に掲載した表によって窺えよう。

表を見ると、壽詩は宋の蘇軾より作られ、元に至って急激に多く作られている。また元では、方回から壽詩序が作られるようになった。これは壽詩が多く作られると、それ等の詩を輯めて一卷とし、序を附けたためである。壽序は、元の鄭元祐によって作り始められ、以後は、明の杜瓊以降次第に多くの人によって作られた。

壽序は民間の「壽誕」で要求された文であるが、朝廷に於てはただ生日を祝賀することが盛大に行われていて、必ずしも六十・七十の長壽である必要はなかった。朝廷に於ける祝賀の文は、壽表や壽疏で、文天祥と袁桷によって作られた例がある。[14]

元末の楊維禎から明初の方孝孺まで全く壽詩も壽序も作られなかったのは、社會が動亂のため貧困だったからである。かくて明初の動亂が收まり、吳地方を中心に經濟が復興發展すると、壽誕が習俗として定着し、奢侈を誇示する序が盛んに作られるようになったのである。

三　古道の復活と載道の文

歸有光は壽誕に何を期待したのであろうか。引用が少し長くなるが、壽序に於ける論の展開の仕方を見る意味で、卷十四の「王黎獻母楊氏七十壽序」をみてみよう。

聞之、「愛親者不敢惡於人、敬親者不敢慢於人。」古之君子、修其孝弟、內以事其親、外以友於鄉人、其心一而已矣。吾以其所以愛吾親者、推之以友其人、而友道行。人以其所以友於吾者、推之以愛吾親、而孝道達。蓋至於今之世、先王之禮、無復有存者矣。而末俗之所尙、相與爲壽、以爲能孝愛其親、古無有也。雖然、壽人之親者、豈非所謂愛吾親者推之以友其人、而友道行歟。壽吾之親者、豈非所謂人以其友於我者推之以愛吾親、而孝道達歟。古有養老之政、退修之以孝養也。民知魯長養老、而後能入孝出弟。民知入孝出弟、魯長養老、而後敎成。今世所謂爲壽者、若禮然而不容已、推是心也、豈不能修其孝養歟。羅氏之獻鳩、司徒之保息、行葦之忠厚、豈不由此而出歟。「爲此春酒、以介眉壽」。「肆筵設席、授几有緝御」。古豈異於今歟。

右の引用は二百八十二字である。これを伏線として、後に楊氏を稱贊する譯であるが、それは、引用以下の部分で百五十八字費やされている。ただし今はこれを省略する。

右の文章をみると、歸有光は冒頭で『孝經』を引用し、次に『論語』「學而」の「弟子入則孝、出則弟」を踏まえて、孝については「內には以て其の親に事え」、弟については「外には以て鄉人を友とす」と

敷衍し、「其の心は一のみ」と斷言している。人を愛する點では、孝も弟も同じであり、だからこそ親を敬愛する者は、人を憎惡したり、慢ったりしないのである。從って逆に、人の親を祝う者は、自分の親を愛するように人の親も愛しているのであるから、その愛を推し廣げて人を友とし、友道を行うことができるし、また、自分の親を祝ってくれる者は、自分を友とする愛を推し廣げて親も祝ってくれているのであるから、そこに孝道が達成されていることになる。古代には長壽を祝賀する禮はなかったが、しかし長老を尊び養う政治があり、官吏は朝廷より退けば孝養を盡くしていた。それ故に民は、長老の尊養を知った後に孝弟が實行でき、孝弟と長老の尊養ができた後に、政治社會を支える教訓が確立していた、と云う。

こうした論の展開は歸有光の獨壇場で、壽誕の精神を、社會を支える根底ともみているのである。當時の壽誕は「禮の若く然り、而して容に已むべからず」、古代の禮であるかのように盛大に擧行され、止まるところを知らないが、「是の心を推すや、豈にその孝養を修む能わざるか」、一なる心＝愛を推し廣げれば、孝弟や尊養を修得できないことがあろうか、必ずできる、と歸有光は壽誕を利用して古道の復活を期待したのであった。前節引用の「家譜記」には孝道衰退の危惧が表現されていたが、壽序に於てはその復活が主張されるのである。

理想の壽序について、歸有先は以下の①②の如く「實」を重視している。

①予謂文者、道事實而已。其義可述、而言足以爲教、是以君子志之。（卷十三「孫君六十壽序」）

②先是、君之子豫卿、謁選在京師、求嚴學士敏卿之文以爲壽。煌煌乎玉堂金馬之制作、鄉里有榮焉。然嚴公之文、所聞異辭、欲道君之實者、宜有待于予言矣。（卷十三「陸思軒壽序」）

③生辰爲壽之儀、不出於古、亦足以寓養老教學之道。而俗以誇詡競于富貴、文至而實不足。（卷十四「狄氏壽讌序」）

②の「實」は、「所聞異辭」に對立する語であることから、壽序の對象者の眞實ということである。③の「實」は直接壽序とは關係ないが、「文」のかざり・うわべと對すれば、本質・內容ということであり、前後の脈絡から「養老教學の道」ということになる。これは既に「王黎獻母楊氏七十壽序」でみたことである。實際壽序にこうした主張がなされていることから、①で「文とは事實を道うのみ」と云う「事實」とは、②の對象者の眞實と、③の古道、とを兼備しているものということになる。またそれ故に、その義＝內容は後世にまで祖述され、教訓になり得るのである。

歸有光はその場限りで消滅してしまう文ではなく、後世に殘る載道の文を理想としていたのである。②の「陸思軒壽序」で、

予居是邑、亦若列禦寇之在鄭之鄙、衆庶而已。故凡來求文爲壽者、常不拒逆其意、以與之竝馳于橫目二足之徒之間、亦以見予之潦倒也。

と云っているのは、屈折した表現になっているものの、不遇ではあっても、「橫目二足の徒」の無學者には言えないことを自分は言うのだという自信の現れであろう。こうした個人的な境遇によって興る感情を壽序に表現するのも、歸有光の文の特色ではあるが、これまで見てきたような壽序に於ける議論や批判は、當の壽序の對象者には適應されないという前提のもとに行われ、またそれを裏返した時、强烈な贊美になっていることは見逃せない。

歸有光以前の壽序は、長壽者もしくは壽誕主催者を贊美する伏線と

して論議を展開することはあっても、批判を折り込むことはなかったし、壽誕の精神は政治の根底であるとまでは言わなかった。歸有光の壽序の需要が高く、また今日まで最多の作品を殘しているのは、一つにここにその原因があるのである。

四　歸有光の長壽觀

歸有光が最初に壽序を書いたのは、嘉靖六年（一五二七）二十二歳の時で、『歸震川年譜』[15]では『孫譜』を引いて次の様に記している。

與同里季子升定交。嘗同子升過王文恪公故宅、誦壁間都太僕穆撰壽序、約二千許言。還家錄之、子升訛二字、先生多脫誤、以意改竄、其文益善。子升曰、「吾正苦不如熙甫之忘耳」。

都穆（一四五九―一五二五）の王文恪（鏊、一四五〇―一五二四）に關する壽序は今日殘っていない。「横目二足の徒」の壽序は勿論のこと、たとえ高官の壽序であっても、餘程のことでない限り壁と共に消滅することの方が多かったのである。殘念ながら歸有光の改良した壽序も殘っていないが、十二歳で古人に志したと云うこと[16]に依ると、既に前節までにみてきたような壽序だったのであろう。

現存の壽序は、鄉試に合格した嘉靖十九年（一五四〇）以降の作である。壽序は依頼文であるため、ある程度の名聲も必要であったのだろうが、しかし、そのことよりもまず長壽者がいなければならず、また壽誕が風習として隆盛していなければならない。多くの長壽者の存在は經濟的な餘裕に依るものと思われるが、長壽の觀念が道教と結びついていることを考えると、世宗嘉靖帝が明代きっての道教信者であったことは、壽誕隆盛への一つの要因であったに違いない。しかし歸有光は、道教には極めて懷疑的であり、仙人と言われる人々が山川に昇仙したとされるのは、その天地山川の神靈さによる、と次の様に述べている。

古之得道者、往往乘雲氣、御飛龍於此。茅君最後出、而山以此名。其後葛玄、葛洪、許邁、陶弘景、楊義和之流、世皆以爲得道仙去。雖其說怪迂、非儒者之所道、要之天地山川之氣、神靈之所降集、理固有然者。（卷十二「福建按察使楊君七十壽序」）

「其の說怪迂、儒者の道とする所にあらず」と云うように、歸有光はあくまでも儒者の立場にある。前節でみたように、壽誕は古にはなかったと力說し、しかし古道を具現する恰好の場であると主張したのも儒者の立場からであった。

それでは、長壽に對してどのような考えを持っていたのであろうか。歸有光は、

世之論人壽、以百年爲限。然修短之數、得之於天、不可以齊。得數之長者、百歲爲老矣。彭祖之百歲、豈非嬰稚之時耶。得數之短者、歲月爲稚矣。殤子之歲月、豈非垂老之時耶。（卷十三「張曾菴七十壽序」）

と云う如く、長壽について、規準とする年限を設定しない。長壽とは、その人がどう生きたかによるのであり、その一つに「靜」でなければならないことを擧げている。

孔子曰、「仁者壽。」夫仁者豈能必壽哉。以其能靜而得壽之理也。人生百年、以區區之形、日與外物爲角。夫苟役役然馳騁眩騖於富貴之途、以其所輕累其所重、若是者雖至黃耇、其道促矣。夫苟不役役然馳騁眩騖於富貴之塗、以其所輕累其所重、若是者雖不至黃耇、其道長矣。（卷十三「龔裕州壽序」）

仁者は「靜」であるから長壽の理を得ていると云い、「靜」とは利慾

に心を動かされず、富貴に奔走しないことであると云う。第一節で悲しい出來事を確かめるため「項脊軒記」を引用したが、その冒頭部分では、喜ぶべきこととして、世俗に煩わされない「靜」かな環境や心理狀態を描寫している。これもやはり壽序と歸有光の代表作品との關連性を物語るものである。また、周秋汀が『老子』を引いて長壽觀を披瀝したのを承けて、次の樣に『莊子』「逍遙遊」を踏まえながら、『莊子』にはない「悲しみ去らば、則ち性命安かなり」と言ったのも、幾度となく悲しみを味わったためである。

客未對、余笑曰、「達哉、先生之論也。其有得于莊子逍遙之旨乎哉。其曰大鵬萬里、鷦鷯一枝、各適其適、不相企慕、則羨欲之累可以絕。累絕則悲去、悲去則性命安。是故壽於人、則爲彭祖、壽於物、則爲大椿。達者能得之、則先生其人也。今而後呼先生爲逍遙公、可乎。」先生聞之喜。（卷十三「周秋汀八十壽序」）

歸有光にとっては、悲しみを去った狀態がが「靜」であったのである。

右の文章は『莊子』の知足安分を論ずるものであるが、だからと言って、歸有光が道家思想を信奉していたとは言えない。次に引用する文章では、確かに富貴壽は運命であるからそれに順應せよとは云うが、ただそれだけではなく、性を盡くせ、と云う。

士大夫致身於朝、所當得爲者、人臣之事。富貴壽考、皆命也。盡性而已、命何與焉。雖然、有可以盡其人臣之事者、非富貴壽考有所不能。……此爵祿榮名所以多患害、而失養性命之原也。（卷十二「通政立齋王先生壽序」）

士大夫は臣として爲すべきことを盡くせ、と云う。富貴、つまり爵祿榮名に馳騖せず、「靜」であり且つ「性を盡く」せば、身體的な長壽とともに仁者としての壽の理も得るのである。

婦人に對しても、順婦慈母となるよう、婦人としての性を盡くせ、と云う。

夫三代王者之化、關雎、麟趾、鵲巢、騶虞之世、可謂盛矣。然其詩猶曰、「嘒彼小星、三五在東。肅肅宵征、夙夜在公、寔命不同。」言婦人秉志壹誠以事其夫、夙興夜寐、無有懈怠、而所能得于其夫與否、蓋不敢自必、而係于命也。……不知充其所爲、以遂萬物之宜、而全天地之性、必至于命而後已。命之所不至、性之所不盡也。……因以識古關雎、麟趾、鵲巢、騶虞之義、以爲天下之道、非一人之爲、而君臣、父子、兄弟、夫婦各得其所、而王化成矣。君子之言性命者蓋如此。（卷十二「顧夫人楊氏七十壽序」）

右の引用で明らかなように、歸有光は、天下を治める道は一人が行うものではなく、君臣、父子、兄弟、夫婦の各々が、自らの天命に順應して本性を發揮することにあると考えていた。これは紛れもなく儒家の言說であり、王陽明（一四七二―一五二八）が道教の二元的世界觀を打破し、天命に順じて心を極め、また性を盡くすことを說いたのと全く同じなのである。

歸有光の壽序は、壽誕・壽序の時俗を批判するだけではなく、時政を諷諫する役割も果していたのである。

おわりに

壽者、人子之所欲得之於其親。（卷十三「周翁七十壽序」）

と、歸有光が子たる者の心情を述べたのは、八歲で母を失い、妻や子どもが若くして死去したことによる。特に母は、存命中、眞夜中であっても『孝經』を暗誦させるほど有光を嚴しく教育した。

有光七歲、與從兄有嘉入學。每陰風細雨、從兄輒留、有光意戀戀

不得留也。孺人中夜覺寢、促有光暗誦孝經。卽熟讀無一字齟齬、乃喜。（卷二十五「先妣事略」）

母への思慕や悲しみは、陸續として起る肉身の死によって新たなものとなり、自らの思想となった『孝經』の精神とともに常に心に潛在していた。それ故幼くして生と死とを意識した歸有光は、壽序に於いて、孝道の復活を主張した。また壽序七十六篇中、婦人を扱ったものが三十三篇あることからも、「世に乃ち母なき人あり。天なるかな、痛ましいかな」（「先妣事略」）と絶叫した彼には、自分には永久に果せない母の壽誕への悔恨があったことが窺えるのである。

そして三十五歳の時、鄉試で、

文者、所以讚述往古、傳示來裔、著之不刊、垂之無極者也。（別集卷二「嘉靖庚子科鄉試對策五道・第一問」）

と筆答した歸有光は、それ以降の進士落第という不遇時において、

余少好觀古事、嘗有意於考論其世。而廢置草野、無史官之任。然時有慕於古之作者得因事立言、以著其是是非非之跡、是斯民之所以直道而行者、庶幾他日有裨於史官。（卷十二「顧孺人六十壽序」）

と云う如く、官にない者の「性」は他日を期して「載道性のある文」を書くことであると意識し、自らの道義的主張を壽序を書くことによって實踐していったのである。

さて、歸有光の壽序七十六篇のうち四十六篇は、依頼者もしくはその經路が明記されている。内譯は、親族者からが十五篇、友人から十一篇、友人の知人からが三篇、有光と同年の進士から六篇、弟子からが一篇、縣の學生から三篇、その他七篇となっている。壽序の對象者はほとんどが官吏または退官者、或いはその妻で、同鄉の崑山の人が多い。壽誕は富貴の人でなければ主催できなかったからであるが、なかには豪農（卷十三「陸思軒壽序」）や豪商（卷十三「周翁七十壽序」、「莊東孫君七十壽序」）もいる。

報酬については、例えば傳を書いた時には次の様に少な過ぎると苦笑を漏らしている。

白居易爲元稹墓誌、謝文六七萬。皇甫湜福光寺碑三千字、裴晉公酬之每字三縑、大怒、以爲太薄。今爲甫里馬東園作傳、可博一盤角菱乎。一笑。（別集卷七「與馬子問」）

沼澤の多い蘇州地方のことであるから、「角菱」などはただ同然に安かったに違いない。しかし、壽序の謝禮については苦情を言う文もなく、もともと壽誕は財産家の行うものであったから、相當の返禮があったものと想像できる。あるいは、家庭内に起った不幸や悲痛にほだされ、時俗を批判しつつ載道性のある壽序を書き綴った歸有光にとって、文を書いた報酬などは問題ではなかったのかもしれない。

明代では文學がより廣く民衆に享受され、また民衆の積極的な文學への參加があった。古文辭の理論が弘治～嘉靖の間に絶大な支持を得たのも、民間に於て詩文愛好者・實作者が增加した爲であった。[18] この愛好者の增加は印刷物の流布に一因があるにしても、實作者の增加は、例えば多くの結社が發生した如く、作品を人に示したり、互いに批評し合ったりできる「場」が多くあったことを物語るであろう。そうした場の一つに壽誕があり、そこでは「横目二足の徒」によって書かれた壽序が展示されていた。歸有光は、そうした習俗の中で、自己の主張をより大膽に表現でき、且つ個性を盛ることのできる文體として壽序を書き綴ったのである。

注(1) 『震川先生集』の諸本は「項脊軒記」とするが、加筆部分に「余既爲

此志後五年、吾妻來歸」とあることから、始めは「志」として書かれたことが分かる。妻の來歸は有光二十三歳の時であるから、「志」制作は十九歳。加筆部分は、「其後六年、吾妻死、……其後二年、……」から、有光三十歳の作と推定できる。

(2) 『震川先生集』正集三十卷、四部叢刊本に據る。清の平步青の『霞外攟屑』に「壽文入集不始震川」の一文があることから、清代には一般に、その量の多さから壽序入集が歸有光に始まるとされていたことが分かる。この文に引く張維屏（一七八〇―一八五九）『松軒隨筆』の「壽文之多、無過震川」の注には、壽序の作品數を「正集七十六首、補集十六首、餘集二十首、共一百十二首」と云う。

(3) 呂璜（一七七八―一八三八）『初月樓古文緒論』。會國藩（一八一一―一八七二）『曾文正公集』卷二「書歸震川文集後」。林紓（一八五二―一九二四）『春覺齋論文』「流別論」、等。

(4) 前野直彬氏編『中國文學史』（東京大學出版會）二〇二頁。

(5) 宋文瀬氏「談《項脊軒志》」（『語文教學』一九五七年九月號）にも周氏と同樣のことが述べられている。

(6) 注(1)。王拯は、加筆部分を跋語とみ、著錄者が誤って本文と一緒にしたと云う。（陳柱著『中國散文史』（臺灣商務印書館）所引）

(7) 注(5)宋氏論文。

(8) 卷二十八「歸氏世譜後」。

(9) 『明史』卷二百八十二に傳がある。

(10) 卷四「書張貞女死事」、「張貞女獄事」、「貞婦辨」、卷七「答唐虎伯書」、「與李浩卿書」、「與嘉定諸友書」、「與殷徐陸三子書」、卷三十「祭張貞女文」、「招張貞女辯」、等張貞女に言及するものが多くある。

(11) 藤野岩友氏「詩經に見える「嘆老」」（『國學院雜誌』五九―一〇）。

(12) 『顏氏家訓』卷二「風操第六」。

(13) 『日知錄』卷五「聖節」。

(14) 文天祥『文山先生文集』卷四。袁桷『清容少士集』卷四十。マルコ＝ポーロ『東方見聞錄』に記すように、元代は朝廷での生日祝いが盛んだった。祝詞の文も多く作られている。

(15) 張傳元・餘梅年著『歸震川年譜』（商務印書館）。

(16) 注(14)年譜。また卷十三「碧巖戴翁七十壽序」。

(17) 『王文成公全書』卷二十五「徐昌國墓誌」。竹內弘行氏「王陽明の「徐昌國墓誌」について」（『高野山大學論叢』十五）。

(18) 前野直彬氏「明代古文辭の文學論」（『日本中國學會報』十六）。

(19) 横田輝俊氏『明代文人結社の研究』（『廣島大學文學部紀要』特輯號三）。